

山根聡『4億の少数派 南アジアのイスラーム（イスラームを知る 8）』（東京：山川出版社、2011年、114頁、本体1,200円＋税、ISBN978-4-634-47468-0）

（評）二宮 文子*

本書は、「イスラームを知る」シリーズの第8巻である。このシリーズは、全12巻中、4巻がそれぞれロシア、中国、南アジア、フィリピンのムスリムに当てられている。また、原理主義やイスラーム銀行など、近年の政治社会動向の中で注目を集めているテーマも扱われており、現代のイスラーム、ムスリムの活動を理解するために格好のシリーズとなっている。シリーズ全体の特徴として、図版や写真が多く使用されており、また分量や内容から見ても、大学の教科書や一般の人々向けの入門書として用いられることを意識していると言える。

まず、本書の内容を簡単にまとめていく。なお、本書に関しては、すでに井上氏による書評があるので、そちらも参照されたい [井上 2012]。

本書は短い冒頭部分と本編五章、参考文献表から成る。本編の合間には、4つの短いコラムが挟まれている。冒頭部分では、「4億」の「少数派」という意表をつくタイトルから、日本における南アジアのイスラーム研究の現状が解説される。イスラームの文脈では、ムハンマドの故地であるアラブ圏という中心に対して、南アジアは周縁的な存在と位置づけられてきた。また、南アジアのムスリム人口は日本の3倍以上の4億人であるが、その数は9億人近いヒन्दゥー教徒に比べれば少数派である。この「二重の周縁性」と、史料に用いられている言語の多様性によって、南アジアのイスラーム研究は限られたものに留まってきた。このような現状認識と、南アジア理解の多角化や深化のために南アジアのイスラーム研究が必要とされているという見解は、多くの専門家に共有されているものであろう。

第1章「インド・イスラーム文化」は、1858年のムガル朝滅亡に至るまでの、南アジアのムスリム諸王朝の歴史の概要と、その中で発達した文化の解説である。扱われている文化的側面は、スーフィーの活動に代表される宗教的動向、言語や文学、特に詩文学の展開、そして建築である。特に著者の専門であるウルドゥー文学については、ガーリブやミール・タキー・ミールを始めとする詩人たちの作品の翻訳がふんだんに引用されており、叙述に彩りを与えている。

第2章「西歐的近代との出会い」では、サイド・アフマド・ハーンに始まるアリーガル運動、南アジアが「イスラームの家」か否かを巡る論争、デーオバンド学院の設立という三つの例を通し

* 青山学院大学准教授（インド・イスラーム史）

・ 2011、「聖者の因子—中世インドのスーフィー聖者の事例から」、『宗教と社会』17、3-16頁。

・ 2011、「北インド農村地域におけるスーフィー教団施設—ハーンカー・カリーミーヤの事例」、『東洋史研究』70巻3号、38-68頁。

て、イギリス支配によってもたらされた「近代」に対する、19世紀南インドのムスリムたちの多様な反応が整理される。この章で紹介されている、イギリス統治下のインドが「イスラームの家」ではないというファトワーを受けて、約2万人のムスリムがアフガニスタンへの移住を試みたという出来事は、イスラーム法上の議論が社会に与えた影響の例として興味深いものである。

第3章「イスラームの政治運動化」は、汎イスラーム主義やヒラーファト運動、タブリーギー・ジャマアトの設立など、20世紀前半のムスリムの社会・政治的な活動に触れる。この章で最も多くを占めるのは、イクバルの思想的変遷である。イクバルがイメージする民族的連帯が、領土的ナショナリズムに基づくヒンドゥーとの協調から、汎イスラーム主義的なムスリムの連携へと変化する様子が、彼の詩の内容から明瞭に示されている。

第4章「イスラームと国家の関係」では、バングラデシュ独立や西パキスタンでの政治的動向、イスラーム主義思想家マウドゥデーの活動、インドにおけるムスリムの状況など、分離独立からズルフィカル・ブットー政権までの時代が扱われている。

第5章「世界情勢と南アジアのイスラーム」では、現代の南アジアのムスリムたちの状況が、パキスタンとバングラデシュの政治状況、慈善活動あるいはターリバーンのような宗教意識に基づく社会運動の概要、カシュミール問題、文化芸術、さらには南アジア系移民社会の形成など、さまざまな側面から解説されている。

以上が本編の構成である。扱われている時代の長さによるものか、第1章に最も多くのページが割かれているが、残りの4章は近代以降の叙述に当てられている。現代情勢に重きを置くシリーズの性質をよく表した構成と言えるだろう。4つのコラムではそれぞれ、サイド、シャイフ、ムガルなど、南アジアのムスリム社会に見られる出自概念、パンジャープ、特にラホールを拠点としたムスリム知識人の文化活動、18-20世紀における日本と南アジアのムスリムの接触、パキスタンの軍事政権の性質が扱われている。

著者が冒頭で指摘しているように、わが国における南アジアのイスラーム研究は、質は高いが圧倒的に少数であった。特に、近代に直面したムスリムの社会思想や、それらが社会・政治上の運動に発展していく様態など、19世紀から20世紀半ばのムスリムの活動については、日本語で読める研究は数える程しか存在していない。そのような中、手頃な分量で、かつ多くの人物の活動や相互関係、興味深い史料や事例を具体的に盛り込みながら、近代～現代南アジアのムスリムの政治文化状況をまとめた本書のような概説が登場したことは、南アジアのイスラーム理解に資するところが大変に大きい。評者もその恩恵を受ける立場である。一方で、本書の内容については若干疑問を感じる点もある。以下にその疑問点を挙げていきたい。

最も気になった点は、本書の記述が北インドの動向に限られていること、そのことについて説明が見られないことである。もとより、たかだか100ページ程度の概説で、南アジア全域のムスリムの活動を扱うことは到底不可能な相談であり、南アジアのムスリムの中では多数派で社会的影響力が強い

北インドのイスラムの活動、特にデリーやパンジャーブを中心とする地域に記述が偏るのは当然と言える。しかし、中～南部インドのイスラムの存在やイスラームの諸宗派、例えば現在のケーララ州の人口の25%近くを占めるマラヤラム語話者イスラムや、ハイデラーバードやラクナウのナワブ政権下で発展したシーア派文化などに全く触れられていないのは、南アジア内のイスラムやイスラーム文化の多様性への配慮が不足していると言わざるを得ない。この点は、現在の南アジアのイスラム人口の分布図や、使用言語の一覧表などを掲載するといった方法で補えたのではないかと思う。

また、記述のバランスと紙幅の関係という面において、評者には第1章の分量が多すぎ、かつ後続の章との接続が悪いように感じられた。前近代にそれなりの紙幅を費やしたのは、概説に求められる網羅性を意識してのことであろうし、前近代の専門家である評者としては、近代・現代の社会文化の背景に存在する歴史の重要性は大いに強調したいところではある。しかしながら、前近代の王朝史やスーフィーの活動については、各出版社から発行されている世界史シリーズや荒松雄氏の一連の著作を通して、日本語でもかなりの情報が入手できる。そのような部分は大胆に省略し、ワリーウッラーの思想や現地語での出版活動など、後続の章の内容に関わる部分の説明を増やした方が、全体の流れは良かったのではないだろうか。

同様に、2章から5章の記述においても、網羅性を優先して単調な事実の羅列になっているのではないかという部分が見られた。より多くの固有名詞を挙げることも大切だが、「イスラームの家」の定義を巡る議論や、サイイド・アフマド・ハーンやマウドゥーディーの思想などの個別の事例において、史料からの引用が添えられていれば、南アジアのイスラームに関するもっと具体的なイメージを読者に与えることができただろう。

以上、無い物ねだりのような感想を述べたが、評者が挙げた点は、南アジアのイスラームの概説としての本書の本質的な価値を損なうものではない。本書はこれから南アジアのイスラームを学ぼうとする人々にとって貴重な導きの書であるし、本書に導かれて南アジアのイスラーム研究を志す人々が増えることを大いに期待するところである。

参考文献

井上あえか、2012年、「山根聡『4億の少数派—南アジアのイスラーム』（イスラームを知る8）山川出版社 2011年 114頁」、『イスラーム世界研究』、第5巻 1-2号、497-499頁。